2021 年 1 月 19 日（火）14:00－15:30
KURA「研究者の歩きかた」セミナーシリーズ #7：L-INSIGHT／KURA 連携プログラム
パブリッシングセミナー第１回「ジャーナルを立ち上げる」
主催：京都大学学術研究支援室（KURA）／京都大学 L-INSIGHT　協力：紀要編集者ネットワーク
※本セミナーは第３回紀要編集者ネットワークセミナーを兼ねます

講演 2

MURAKAMI REVIEW

小島基洋（京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授）

よろしくお願いします。

先ほど、金澤先生が新規開拓グループにはオンライン雑誌がいいというお話をされましたが、まさに日本で村上春樹研究を新規開拓すべく、雑誌を発刊しております。村上春樹研究フォーラムというホーム・ページがありまして、ここに MURAKAMI REVIEW という雑誌を掲載しています。ゼロ号発刊は 2018 年で、先日、2020 年の第二号を出したところです。

オンライン雑誌の功罪

最初にオンライン雑誌の功罪という話をさせていただきます。

まずはメリットです。先ほど、金澤先生は若干の経費はかかるとおっしゃっていましたが、Murakami Review に関していえば、経費は基本的にはゼロというふうに考えています。オンラインですから当然印刷業者を通さないですし、通信料もかからない、切手代もかかりません。編集上の手間もほぼないので、購読料も必要ないということになります。

もちろん、デメリットもあります。紙媒体がないものですから、要するに物理的に手に取ることができません。しかし、それはデメリットとは呼べないのかもしれません。私自身は紙の学術誌というものへのノスタルジックな思い入れというものは相当強くありますし、フェティッシュな紙の魅力というのも理解しているつもりです。しかし、我が身を振り返ってみても、この十年、紙の学術誌を手に取って熟読したことは数えるほどしかないんです。それを踏まえますと、紙の雑誌が存在する意義は残念ながら殆どないのではないか、それが結論です。これに関してはいろんなご意見があるのだと思いますが。

雑誌の作り方

次に雑誌の作り方に関して具体的なお話をさせていただきたいと思います。本誌は査読形式を取っていないので、原稿を依頼するということになります。その時にフォーマットをメール上で添付しておいて、完全な原稿で提出してくださるようお願いします。そうしますと、受け取ったＷＯＲＤファイルの原稿を、ＰＤＦ化して結合するだけですので、編集作業はほとんどゼロだとも言えます。

村上春樹／Haruki Murakami 研究の現状

こうして、村上春樹に関する雑誌を発刊しているわけですが、ここで村上春樹をめぐる研究状況について、もう少しご説明させていただきたいと思います。

村上春樹研究の中心は、奇妙に思われるかもしれませんが、国外にあります。台湾の淡江大学が、村上春樹研究センターという組織を十年ほど前に設立して、そちらが毎年、村上春樹に関する学会を日本語で行っています。二年に一度は日本でも開催していて、2017 年に同志社大学で行われた学会にたまたま参加した私はびっくり仰天しました。台湾の方たちが、参加者が百人を超える学会を日本で見事に運営されていたのです。ここまで見事な組織がありますと、あえて日本で村上春樹研究の拠点をつくる必然性はないのかもしれませんが、実際、国文学会は村上春樹に対して積極的に取り組んではいないというのが現状です。

一方、英語圏になると、ニューカスル大学のマリアンヌ・ギッテさんという研究者が中心となって 2018 年に大規模な学会を開催しました。これも百人を超える規模の大イベントで、柴田元幸さんから加藤典洋さんまで錚々たる日本人の批評家から、ジェイ・ルービンといった海外の著名な村上春樹研究者が顔をそろえるという奇跡のような学会でした。

村上春樹研究フォーラムの設立と展望

翻って日本はどうかといえば、村上さんの母校・早稲田大学で記念館設立の動きがある以外では、目立った村上春樹の研究組織というのはありません。私は個人的には、台湾とニューカッスルの折衷的な学会、つまり日本と世界を結んでいけるような組織が、このお膝元・日本にも必要ではないかと思い、村上春樹研究フォーラムを立ち上げました。とはいえ、組織があるわけでもなく、資金があるわけではない。となれば、インターネット上につくってしまえばいいのでは、つまり、ホーム・ページと Facebook と Twitter があれば学会が立ち上げられるのではないかと思い立ったというわけです。京都府立大学の俊英・横道誠先生のアイディアでした。

カジュアルな研究組織は物理的に存在しなくても、インターネット上で存在できるのではないか、これは目から鱗でした。もちろん、学会のすべてがそうなったら、アカデミズムは機能不全に陥るはずです。当然ですが、盤石な学会組織というものがあって、公正な厳しい査読原理が働いてこそ、学問の世界は存続していけるものと思いますし、そもそも、村上春樹研究フォーラムもそういった組織の上に立脚していることは十分に理解しています。ただ、実際には SNS の発達によって、少しカジュアルな学会運営というのがゲリラ的に可能である、というのも確かなのです。そして、そういう組織に最もふさわしい雑誌は何か、そういう発想の中で、ウェブ雑誌 MURAKAMI REVIEW は生まれました。

本誌を発刊して驚いたのは、世界は予想以上にフラットになっているということです。発刊から一年とたたないうちに、本誌に掲載された論文がある学位論文の中で言及されたのを目にしました。考えてみれば、大きな組織の厳密な査読を通った論文であっても、ウェブ上の研究組織 MURAKAMI REVIEW の論文であっても、いいかどうかは別として、同じ土俵に立っているんだということです。MURAKAMI REVIEW は確かに紙として存在すらしていないのですが、京大のリポジトリの KURENAI に載っている以上、半永久的にそこに

存在しています。紙だと数百年の耐久性しかありませんが、KURENAI 上の論文は、京都大学が機能しなくなるまで（たとえ機能しなくなっても）、そこに有り続けます。つまり、紙として存在しないというのは、デメリットではなく、むしろメリットでもある時代が来ているということなのです。

ご清聴、どうもありがとうございました。